

【小説部門・大谷文芸賞】

僕が愛したたった一人の君へ

岐阜県立東濃実業高等学校 第1学年 波多野 柑奈

「時間は唯一皆に平等に与えられたもの」

祖父がよく口にしていた言葉だ。昔から何度も聞かされていた。あの頃は、ただ聞いていただけで何も感じなかったが、今ではあの言葉を間違っていると思うようになった。

僕には、小さい頃から婚約者がいた。恋愛結婚などが許される現代で婚約など時代遅れだという人も多い。けれど、家同士が決めた婚約でも僕らは互いを愛おしんでいた。二人で絶対に幸せになろう。それが、二人で一番叶えたい夢だった。しかし、この世に絶対という言葉はないのだ。彼女は、僕との思い出を残して帰らぬ人となった。すい臓がんだった。発見した時には、遅すぎで医者から

「余命一年もありません」

と余命宣告を受けた。現実を受け入れなければいけないのに、受け入れたくない。けれど、「残りわずかの時間を無駄にはできない」

そんな思いが脳裏を過った。彼女と話し合い最後の時まで一緒に過ごす決めた。

「結婚式を挙げよう」

彼女にそう提案すると

「ううん。あと一年も生きられないのに挙げる必要はないんじゃないかしら」

と寂しそうに、申し訳なさおうに否まれた。

「でも・・・」

夢だったじゃないか。そう言おうとしたけれど彼女が何を思ってそんなことを言うのか察しがついた。結婚式については、随分と前から二人で話していた。もちろん僕も楽しみにしていたがそれよりも楽しみにしていたのは彼女の方だった。そんな彼女が断ったのは、結婚式を挙げたことによって自分が死んだ後も僕を縛り続けたくはなかったからだろう。だからこそ、僕はその言葉を言えなかった。長い時を一緒に過ごしていた僕らだからこそ互いに何を考えているのか、思っているのかが自然とわかるようになっていた。だからと言って全てがわかるわけではない。互いに隠している秘密もあれば、理解できない時もある。それでも、疑ったりはしないし、それで喧嘩になることもない。それほどまでに、今まで築いてきた信頼は大きいのだ。けれど、何を思って断ったのか分かっていても自分たちの夢である結婚式を諦めたくない。彼女が僕を縛り続けたくないのもわかる。僕が彼女の立場になったら同じことを考えるだろうから。僕は彼女の顔を見て、

「ああ、僕らは命があるからこそやりたいことが出きる。だから、人生の中で時間をどう使うかが大切なんだ」

祖父から、幾度もなく時間と命の大切さについては聞いていた。

「時間は命だ。だから、大切なんだよ。流れた時間は二度と帰ってこないから」

と、けどしっかりと考えたことはなかった。でも、こんな状況だからこそ祖父が何を思ってそんな言葉を言ったのかが理解できた。

人は、生きている分だけ時間がある。でも、後悔したり何にもしなかった時間は帰ってこない。過去に戻ることもできない。それを理解した今だからこそ、後悔したくないと思える。

僕は、

「指輪の交換だけでもしよう」

そう提案すると、その言葉に続けて

「結婚式は挙げなくてもいい。その代わり、二人でやりたかったことをできる限りやろう。

残りの時間を後悔で終わらせないために」

それを聞いた彼女は、戸惑った顔をしていたが

「そうだね。何もせずに終わったら後悔しか残らないから」

彼女の返事を聞いて僕は、安堵した。さっきのように、僕を傷つけないからと夢を諦めようとしていると思ったからだ。

「ありがとう」

たくさん伝えてきた言葉。この言葉が、人に気持ちを伝えるのにどれだけ大切か改めて分かった。

余命宣告を受けた次の日、病院に行くとき医者から確率は低くても入院をして完治を目指すか、延命治療を行うか、それとも、入院をせずに緩和ケアを行うかと問われた。この選択は、たった数時間で決められることではない。医者は、

「決まったら教えてくれ」

と言いその場を去った。僕達は家に帰ると二人で話し合った。

「少しでも生きられる確率があるのなら完治を目指す方がいい」

僕がそう言うと、彼女が

「けれども、それを選択して完治しなかったら入院していた時間が無駄になってしまう。二人でいられる時間が少なくなってしまうだけになる」

互いに何がいいのか、分からないでいた。どの選択をしてもこれから何が起こるのか見当がつかない。そして、その選択が妥当だったのかどうかさえ先に進んでみないと分からない。でも、最後に決めるのは彼女だ。たとえ、婚約者であっても人の人生を勝手に決めることはできない。僕はただ、意見を言うだけ。彼女が決断を下せるように。

一晩中話し合った結果、入院せずに緩和ケアを行うことにした。発見が遅く、余命宣告まで受けたのだ。入院したところで完治する確率がどれだけ低いのか想像ができた。病院に行き、医者に伝えると

「わかりました。ただ、余命宣告を受けたからといって諦めないでください」

その言葉を聞いて彼女の瞳には涙がにじんだ。

「はい」

彼女は、少し泣きそうにでも、どこか嬉しそうに返事をした。そんな彼女の様子を見た僕は、よかったと心の底から思えた。この言葉を聞いた彼女が少しでも素直になれると思ったから。

病院から帰えると僕達は、二人でやりたいことをリストにまとめた。リストには、時間が掛かるものとすぐに叶えられるものがあった。新しくアルバムを作ることや、一緒に映画を見ること。そんな小さなことばかりだが短い期間で思い出を作るには十分だった。

「次は、水族館に行こう」

リストにある項目を一つ一つやり遂げていく。

「次は・・・」

一日でリストにかいてある項目を何個もやり遂げることもあれば、ひとつしかできないときもある。それに、リストを作った日からやり続けていることもある。新しいアルバムを作ること。日が経つにつれて一ページまた一ページと埋まっていった。

「アルバム、半分以上埋まったね」

彼女が嬉しそうに言う。その顔を見て僕は

「そうだね」

と彼女の言葉に返した。一日一日がとても大切で、この時間がずっと続けばいいのに。いつもそう思う。彼女が、嬉しそうな顔を見せる度に僕は幸せだと思えた。今までも、彼女が笑ってくれることが僕の幸せだった。しかし、思い出を作っている今が一番幸せだった。リストにある項目をやり遂げていく度に時間が過ぎるのを感じながら毎日、リストを確認する。そして、一つ一つやり遂げていく。

リストが完成に近づいてくると

「もう少しで完成しちゃうね」

寂しそうに彼女が言う。

「うん」

互いに寂しさを抱えながら言葉を交わす。リストには両手で数えられるくらいしか残っていなかった。アルバムの最後のページにたどり着くまであと少しだった。カレンダーを見ると、余命宣告を受けた日から一年が過ぎようとしていた。日に日に彼女の体が弱っていくのが目に見えて分かった。

「後どれくらい一緒にいられるのかな」

そう言った彼女は悲しそうな顔を浮かべる。当たり前だ。思い出を作ったって、死にたくなんてないはずだ。もっと生きていたいと思ってるはずだ。それは、僕も同じだ。死んで欲

しくない。もっと一緒にいたい。そう思っている。けれど、時間は限られている。昔、祖父が言っていた言葉は間違っている。唯一平等に与えられたものが時間ならば人が生きる時間も同じなんじゃないのか。そう思えた。一人一人の一日の時間は同じだ。けれど、命が終わる時間は皆違う。それは、本当に平等と言えるのだろうか。口にはしなかったが考えてしまった。祖父の言葉を全て否定するわけではないけれど、こんな状況だからこそ分かってしまうことがある。知ってしまうことがある。

「虚しいな」

そのたった一言が口から溢れ出た。

余命宣告を受けた日から随分と日が過ぎた。彼女は、今ベッドの上で生活している。少し前から食欲がなく、ご飯をあまり食べなくなって体重が大幅に低下していた。他にも、様々な症状が出ていた。

「ベッドの上で生活するのは寂しいね」

彼女はそう言って、悲しそうな微笑みを浮かべた。

「僕が、最後までついてるから」

僕が今、答えられるのはこの言葉しか思いつかなかった。彼女にどんな声をかければいいのか分からなかった。彼女が無理やり笑っているのはすぐに分かったから。それに、自分が体験したことがないから無責任なことを言う訳にもいかなかった。でも、入院している患者を見舞いに来る人の気持ちは、十分に理解できた。大切な人が苦しんでいる時、自分は何もできないのがもどかしい。悲しい。そして、そばにいなくなってしまうことへの不安。僕は、そんな気持ちを抱えながら彼女の方を見て覚悟を決める。

「後悔する前に僕が最後にやりたかったことを今、果たすね」

そう言って鞆から箱を取り出す。それを見た彼女は涙を零した。

「結婚式は挙げないけど前に約束したから」

箱をあけるとそこには指輪があった。そう、余命宣告を受けた時に提案した指輪だ。互いに指輪をはめる。僕が彼女に、彼女が僕に。そして顔を見合わせる。すると彼女は、今まで溜め込んでいた涙をすべて流すかのように泣いた。

数日後、彼女は息を引き取った。僕は、これからどう生きていけばいいのか分からなかった。覚悟は決めていたはずだが、彼女の死を目のあたりにするとどうしようもない絶望感が込み上げてきた。彼女との思い出をたくさん作ってきたはずなのに、それでも僕には足りなかった。いや、足りないとわかっていた。彼女がいない世界で一人で生きていかなければならない。そう思うと

「これからどうすればいいのかな」

そんな言葉が口から出てきた。これから自分がどう生きればいいのか、考えた。やりたいことが見つからないのなら死んでしまってもいいのかもしれないとさえ思ってしまった。

そう考えているうちに、自分の彼女への思いが想像しているよりも大きく、重たかったことに気がついた。

「僕は、思っていたよりも彼女のことを愛していたのか」

とつぶやくと涙が溢れ出た。一晩中泣いた。涙が止まらなかった。気づくと、いつの間にか朝になっていた。するとチャイム音があった。玄関を開けると一通の手紙を受け取った。それは、彼女からの最後の手紙だった。開けて読んでみると一文目に

「この手紙があなたの生きる目標になりますように」

とつぶられていた。彼女は、自分が死んだあと僕がどう生きるのか悩むことを予想していたのかもしれないそう思った。再び手紙に目を向け続きを読む。

「これからどうすればいいのか悩んでしまったとしてもとりあえず生きてください。悲しいことがあったらこれまで作ってきた思い出を思い出してください。そして、長い時間をかけてでも生きる意味を見つけてください」

涙が溢れ出た。たくさん泣いたはずなのにそれでも止まらなかった。彼女は僕に生きろと伝えてくれた。彼女が一生懸命かいた手紙を無下にはできなかった。彼女の方まで生きよう。僕が愛したたった一人の君へ

「ありがとう」